

きる限りすべての生徒にその機会が与えられるよう拡充を図る必要がある」ことを力説しているが、「特定の教科を設け」ることは将来の課題だとし、「各教科以外の教育活動における計画の中での履修によることや、職業に関する教科・科目のうち、この学習のねらいにふさわしい科目の選択履修によることが適当である。」としていることから、その真意が、大学に進学しない男子に技術を学習せよとしていることにあるといえるのである。こうした発想からは当然だが、「高等学校の主として低学年において履修する必修の教科」から、技術教育は除外されてしまうのである。いま、やるべきことは、日教組の教育制度検討委員会の主張のように、高校の必修教科に「技術」の教科を新設することを軸にして、現在の受験教育に偏している高校教育を改革し、高校教育の中に労働観なり社会観なりを正しく位置づけた全教科の再編成でなければならないのである。

四

職業教育を主とする学科、つまり、職業課程校での専門教科の科目を、「可能な限り科目を整理統合するほか、主として低学年でほぼ共通に履修することのできる専門の基礎に関する科目を設ける」ことは、一応前むきの提起には違いない。だが、それも前述のような大学進学しない者のためとしての適性・

進路にふさわしいとしての対処を中心にする限り、しよせん、企業に役立つ労働力育成のための教育でしかありえないのである。

職業高校のいま最も悩んでいることは、そこでの教育を希望して入学してくる生徒が、殆んどいないということであろう。いわゆる学力でふりわけられることと適性・進路に應じることとは基本的に異なるのである。この矛盾を解決することなしに、職業高校にしか入学できなかったのだからとして、そこの色に染まれということの徹底を検討することは、職業高校をもそして入学してくる生徒をもバカにしているとしかいいようがない。したがって、実験・実習を重視してみても、何の解決にもならない。そんなことよりも高校教育としての基礎となる教育を徹底して（勿論その中に技術教育も含まれるが）、それを通して生徒の主体的な学習意欲が職業教育と結びつくよう配慮した上で、専門教科・科目を選択させてゆくことがすじ道なのである。

四

こうみえてくると、高校三原則の一つである総合制の視点から、高校教育をみ直すことが、教課審答申の批判にとっても、われわれの側の高校教育確立にとっても、重要な課題となっているといえるのである。

（都立向島工業高校）

事務局長退任のことば

佐々木 享

技教研の事務局長は、創立以来10年余を原正敏先生が、ついで70年8月から76年7月まで6年間を私がつとめ、76年8月から河野義頭先生に引継がれました。私は、先達が敷いて下さった路線を継いだに過ぎません。この間に、私より若い人達の全幅の協力で事務局体制が確立し、常任委員会を中心に

会を運営する方式が定着してきました。会員数の増大、東北民研から独立した全国大会、『会報』と『技術教育研究』の定期発行、公開研究会等を常任委や事務局の方々、多くの会員の力添えでなし遂げることができたことを、心から感謝しています。また、前任の、温厚な原先生と違って我が強いという私の欠

陥が表に出て、ご迷惑をおかけしたことに
ついては改めてお詫びします。

技教研の事務局長は、今年度から、見識が
あり、会の運営にかけてずば抜けた力量をも
ち、何よりも私と違って円満な性格の河野先
生に引き継がれましたから、とくに云うべき
ことはありません。あえてくわえれば、会員
各位に、技教研の活動の質的充実と量的拡大
のために、いっそうのご尽力をお願いしたい

と思います。とりわけ、困難な問題の多い中
学校の現場で重責をになっている河野先生の
負担が過重にならぬようご配慮いただきたく
思います。

もちろん私も、職場が変わっただけで、むし
ろ技術教育研究が本業になったわけですから、
各位に伍して今後とも技教研のために働くつ
もりであります。

事務局長に就任して

河野 義 顕

前事務局長の佐々木享先生が今春より名古
屋大学で本研究会の代表委員長谷川淳先生の
後任として教鞭をとられるようになりました。
ここで佐々木先生の辞意が表明され、東京で
の五月定例常任委員会以来その後任について
この件についての話し合いが何回か持たれま
した。後任候補に私の名前が出る度に、私に
その器量のないことや健康上の理由をたてに
して断わりつけて参りました。「古くから
の会員」「適令」等と私を常任委員のみなさん
や、佐々木先生から口説かれたとき、不勉強
でなんの学識も、まとめる能力を持たない
私は、技教研「事務局長」という名とその責
任の重みに押しつぶされそうでした。でもい
つまでも断り切れない事情もあり、本当に不
安感ばかりが先立ったのですが、全国大会前
夜この大任をお引受けすることを決心いたし
ました。

昨年から今年にかけて、創立十五周年、会
報『技術と教育』100号の出版、雑誌『技
術教育研究』10号の出版、そして来年は第
10回全国大会と、技教研にとってはまさに
記念すべきときでもあります。

この15年の間、日本の技術・職業教育を
国民教育の側で正しく推進させるという役割

を大きく果してきた本研究会の今日あるのは、
四百数十名の会員の皆様方の暖いご支援、ご
協力に負うところ大であることは申すまでも
ありませんが、その間献心的に本研究会の発
展を「体ごと」ぶつけられて、この研究会組
織を他の民間教育研究諸団体と伍するよう
にされた初代事務局長の原正敏先生（東京大）
二代目事務局長の佐々木享先生の力に負うと
ころ大と思います。両先生の赫赫たる今日ま
での諸研究・運動の業績や、崇高な人格、精
力的な活動が特に近年本研究会が飛躍的に伸
展した大きな要因であると考えます。

私自身も、今日曲りなりにも技術教育を真
剣に考えることが出来るようになったのもこ
の両先生をはじめ常任委員の諸先生方の思想、
研究、実践に深く学ぶところが大きかったと
深謝しております。

いまの技教研には、今次全国大会の折の総
会や、大会そのものの討議のなかで確認され
た民主的な技術・職業教育の発展にさまざま
な課題・命題が横たわっています。特にこの
ところ小学校・中学校・高等学校の教育課程
改革の激しい動きのなかで本研究会の占める
役割ははかり知れないものがあるといえるよ
うな厳しい情勢下にあるといえましょう。